

法然上人二十五霊場第五番勝尾寺二階堂の縁起

山 本 博 子

はじめに

『法然上人行状絵図』によると、法然は承元元年（一二〇七）十二月八日の流罪勅免の後、帰洛が許される建暦元年（一二二一）十一月七日までの四年にわたり勝尾寺の西の谷に逗留し、その間に、法然は勝尾寺に法服を施入し、さらに所持の一切經の施入に際しては、聖覺に經論開題供養の唱導をさせている。ところが、明和三年（一七六六）刊の靈沢の『円光大師御遺跡廿五箇所案内記』（以下『案内記』と略）の第五番勝尾寺二階堂の項では、法然は承元四年（一二一〇）正月二十一日に善導の来現によって布薩戒を伝受し、善導と法然はその影を両扉に写し残したと、法然の諸伝記には無い出来事を記し、さらに、その影のある人が削り洗ったが元の通りであり、心静かに念仏を称えれば、次第に浮かび現れて拜むことができるとして、二階堂が法然の靈跡であることを主張する。

本稿では、靈沢が記すような勝尾寺二階堂での法然の布薩

戒伝受の出来事の語り始められた時期、及び、その内容の変遷について、勝尾寺の縁起類や他の史料から明らかにする。⁽¹⁾

一 勝尾寺の縁起類に見る二祖対面

善導と法然が時空を超えて対面する所謂「二祖対面」は、現在の浄土宗では、承安五年（一二七五）の立教開宗の時と、建久九年（一一九八）の『選択集』撰述の時の二回とされる。⁽²⁾ところが、勝尾寺の縁起類の中で、法然のことを記す最も古い史料である延宝八年（一六八〇）刊の『摂津国勝尾寺略縁起』では、

浄土宗元祖源空上人承元年中に、善導大師夢中に告、汝専修念仏弘る事導。浄土布薩戒を付属せん。勝尾寺ハ無双の霊場、彼に移住せらるべしと。大師の告にまかせ当寺二階堂に四年籠居し給ふ。或夜善導大師忽然と現じ、浄土布薩戒を付属し給ふ。故に善導大師末世の疑を決せんため御影を脇板に残し、又法然上人も御影を残し置、両祖の尊影今猶二階堂に有。上人の曰、此寺に一度参詣の人ハ、一仏浄土の友たるべし。往生をもとめ念仏を信ずる輩、

法然上人二十五霊場第五番勝尾寺二階堂の縁起（山 本）

たれか歩をはこび、此尊影をおがまさんや。⁽³⁾

とある。承元年中（一二〇七―一二一一）とあるが、承元の改元は十月二十五日で、『法然上人行状絵図』卷三六によれば、法然の勝尾寺への登山は承元元年（一二〇七）十二月八日の流罪勅免以降であるから、善導から勝尾寺への移住を勧められた一回目の対面は、法然が讃岐に滞在していた承元元年十月二十五日から十二月八日の間となり、さらに、二階堂に籠居していた「ある夜」に、善導は法然に浄土布薩戒を附属する二回目の対面がある。

ところが、天和三年（一六八三）に別伝が作った『応頂山勝尾寺縁起』下巻（元禄一六年（一七〇三）刊）では、承元元年（一二〇七）の流罪勅免の十二月八日の前日に、善導が法然に勝尾寺で布薩戒を授けることを夢告し、さらに、建暦元年（一二二一）正月二十一日に二階堂で布薩戒を授けたと、二祖対面の日付を明確にして、板壁に影の跡が残る絵を付す。⁽⁴⁾この『応頂山勝尾寺縁起』上下二巻は、別伝の師の慧翁が勝尾寺を訪れた際、当寺の古記の多くが蝕まれていたのを見て、別伝に命じて新しく制作させたものであるが、「今春（天和三年）特自登山。会諸耆老。詳考古記。不揣匪才。刪繁補闕。略紀大概云爾」（下巻二四丁表）と記すように、当時勝尾寺で語られていた二階堂の縁起を補った可能性が考えられる。この『応頂山勝尾寺縁起』は絵入りの「本縁起」の体裁

をとっており、一方、『撰津国勝尾寺略縁起』は、開帳を行った時などに刊行され参詣者に配布される「略縁起」の体裁をとっている。「略縁起」は一般的には「本縁起」の内容を抄出したものが多く、容易に内容を理解できるようにしたもので、『撰津国勝尾寺略縁起』もあえて詳細な日付を示さず、法然自らが残した壁板の御影に参詣することを勧めることを主眼としている。このように『撰津国勝尾寺略縁起』と『応頂山勝尾寺縁起』とは、その成立時期が近く、法然に関わる記事もほぼ同内容であることから、同一の史料をもとに作られた可能性が考えられる。

二 勝尾寺の縁起類以外に見る二祖対面

『撰津国勝尾寺略縁起』や『応頂山勝尾寺縁起』とは異なる内容をもつ史料を以下挙げる。第一は、寛文六年（一六六六）刊の古浄瑠璃である井上播磨掾作の『ほうねんき』である。その「第五 上人帰京并仏法はんじやうのこと」（一九丁表・二〇丁裏）には、

程なく、つの国。かつわうじに入給ひ。せんしやうぜんざんのこせき。しやうによ上人の、わうじやうのち也。二かいとうのほんぞんは。ゑしんの御さく、あみだ如来。是にてべつし、念仏を申させ給ふ。まんずる、やはんのころ。こくうにちうまんす。上人、ふしきにおほしめされ。西方にむかひ。かつしやうして、おわし

ます所に。ようがんみ、やう成。御そう一人。こしより下は、こんじきの光をはなち。こくうに、た、ずみ給ひける。上人きいのおもひをなし。いか成仏ほさつの、御らいげんにてまします。あら有がたの、御事やと。かんだんくだきて、らいはひ有。其時、おそうの給はく。たいとう、念仏かうぎやうの、そし。せんたう大しとは、我こと也。御身、しやうろのけだう、しんじつ也。たいてんすへからず。念仏三まひの、ほつすい。ほうめつ、はくさひの時まで。りやく有べし。されは、十方、がうじやの、諸仏も。こねんまします。いよく、しゆじやうりやく有べしと、の給へは。上人、かんるい、あさからず。有かたや、まつせの、しゆしやうの、ためなれは。御すがたを、のこさせ給へと、の給ふ時に。大し、尤かなと。御座になをらせ給ひ。上人へ十念さつけたまへ。かうみやうかくやくと、はなし給へは、ふしきや御すがた。いたとに、うつらせ給ふ。法然も共に、うつさせ給ふ。ふしき也けるしだい也。かさねて、ぜんどうの、みかげに。御口より、三そんのあみだ。ふき出ださせ、給ひしは。有がたかりける、しだい也。今のよに至まで。かつわうじに、みかげのいたと、とて、あるとかや。

として、二祖対面の絵を挿入する。『撰津国勝尾寺略縁起』より約十五年早く成立した『ほうねんき』では、立教開宗時の二祖対面は記さず、勝尾寺二階堂での別時念仏満行時の二祖対面を記す。そして、勝尾寺の縁起類に記された布薩戒の付属には触れず、善導が法然に十念を授けたことを記す。また、勝尾寺の縁起類と同様に、板壁に善導・法然の姿が残されたことを記すが、善導の口から阿弥陀仏が吹き出したとい

法然上人二十五霊場第五番勝尾寺二階堂の縁起（山 本）

う勝尾寺の縁起類には見られないことも記す。『ほうねんき』は法然の伝記を語る古浄瑠璃であるが、布薩戒の付属を記さないという理由のみで、その内容が勝尾寺の古い縁起史料から引用されたとは言い難い。『ほうねんき』の内容の多くは、真宗系の色合いの濃い『正源明義抄』を根拠としており、既にあつた二階堂の縁起から、布薩戒の付属のことをあえて削除した可能性も考えられる。しかし、現在確認できる勝尾寺の縁起類の成立以前の二階堂での二祖対面や御影の板の存在が確認する最も古い史料である。

第二は、元禄十四年（二七〇二）刊の岡田徂志編『撰陽群談』巻一四の勝尾寺二階堂の項である。

伝記云、勝如上人、住山五十年、或時円光大師、草庵を是に結で、専修念仏勤行あり、一夕夢中に善導大師に見玉ふ、師告曰、汝能専修念仏を始る事尊しと。浄土布薩の真戒を付属し、且勝尾寺は、日域無双の霊場、住山専修すべしと也。師の言に応諾して、住山念仏四年、一夕亦善導に見ゆ、円光礼拝す、師も亦然之、師弟互に合掌の像、左右の扉に移り、嚴然たる事画工の如図之、今猶当院宝物にあり、世云板御影是也。

とある。勝尾寺の縁起類では、法然は配所の讃岐において、善導から勝尾寺で布薩戒の付属を夢告されるが、『撰陽群談』では勝尾寺に草庵を結んで後のこととする。しかし、『撰陽群談』が引用する「伝記」がいかなるものか確定できない。

第三は、霊沢の『案内記』である。勝尾寺の縁起類とは違

法然上人二十五霊場第五番勝尾寺二階堂の縁起（山 本）

う承元四年（一二二〇）正月二十一日の布薩戒の付属を記すが、その文章は正徳三年（一七二三）刊の寺島良安編『和漢三才図会』巻七四からの引用である。⁽⁸⁾ 寺島良安は大坂住の医者で、『和漢三才図会』の序文によると、天和二年（一六八二）頃には『和漢三才図会』の編纂に着手しているので、勝尾寺の縁起類ではなく、当時勝尾寺にあった古記録から引用した可能性も考えられる。

三 新出の『応頂山勝尾寺二階堂縁起』

二階堂のみの単独の縁起としては、明和八年（一七七二）一月刊の『順拝第五番二階堂両祖師縁起』⁽⁹⁾がある。これには讃岐での善導の夢告は記さず、建暦元年正月二十一日の夜、浄土布薩戒の伝授や壁板に影を残したことをのみを記す。しかし、この縁起は明和八年二月刊の『西国第廿三番札所撰津国勝尾寺略縁起』⁽¹⁰⁾の末尾部分と内容が同一である。しかも、この『西国第廿三番札所撰津国勝尾寺略縁起』には、青蓮院の尊証法親王（一六五一～一六九四）が外題を染筆した三巻の本縁起から略抄したものと付記があるが、この三巻の縁起は現在確認できず、刊年不詳の『撰州応頂山勝尾寺本尊靈宝目錄』⁽¹¹⁾から、仮名縁起であったことが分かるのみである。

ところが、明和八年より約五十年前の宝永四年（一七〇七）に、浄土宗僧侶の珂憶⁽¹²⁾（一六三五～一七〇八）が作った『応頂

山勝尾寺二階堂縁起』⁽¹³⁾がある。この縁起は、前半部分では、二階堂は勝尾寺第四座主証如が閑居し、加古の教信が来現した霊地として、証如の伝歴を記す。後半部分では、法然が配所において流罪勅免の前日、善導から勝尾寺での布薩戒付属の夢告を受け、最初は勝尾寺の西谷の草庵に住み、その後、証如の古跡とされる二階堂に移ったと記した後に、

建暦元年正月廿一日の夜におよびて、上人道場に抛坐し、三尊の前に沈水香を焼き、三尊の願に加被を請ひたまふ。光明院の大師忽然として空中にあらはれて、則浄土宗本基の布薩戒を授与したまふ。大師曰此真戒ハ出離生死の大燈一大事の因縁なり。自今以後予が相承の戒儀を以て有心の通俗にさつくへしと云云。伝戒卒てかさねて大師に曰、此道場に来て前仏的伝の大戒を汝に付属するの支証末代除疑生信の爲にとて、ミつから真影を壁間にのこして去たまふ。異香室中にと、まつて聖容なをあるかとし。上人遺戒を願ひうへる事、水を器に伝るかことくして伝灯の後、心に念したまはく、三国相承の戒儀の仏の祖の出懐うひくしくも、予にと、むる事、併本師招授の正印にあらはる。しかれハ京師和尚の祥瑞とひとしく我も没後の疑をふせくのてたてを残さむとのたまひて、大師の真影にならへて上人もおなじく壁間に影像を残したまふ。いまの二階堂の両祖師の真影是なり。このゆへに当山ハ浄土宗念仏往生の血脈布薩伝戒和朝最初の霊地、諸仏影現の淨域なり。願生安楽の望ミあらむともからにおみてハ、誰の人かあゆミをはこハさらむ。（中略）殊ニその勝利のしるしを当山に残したまふ事、有心の身としてあにうたかハむや。一度参詣のこ、ろさしを生せは当来値偶の望ミたりぬへし。

と記す。布薩戒の付属や影を残したことなど、基本的な内容は『摂津国勝尾寺略縁起』や『応頂山勝尾寺縁起』と同じであるが、善導や法然の会話を具体的に語り、二階堂が布薩戒の霊地で、加古の教信や善導が来現した浄域であるとして、参詣を勧める内容となっていることから、この縁起が二階堂の法要時に読み上げられたものではないかと考えられる。また、この縁起には、延宝五年（一六七七）に語られた話として、大阪城落城の頃に、善導・法然の影に対して、ある者が「邪念甚しく、狐疑の心ふかきにまかせ、小刀をもつて三刀けつるに猶あさやか」であつたと記すが、この話が靈沢の『案内記』で影のある人が削り洗つたとする出処かも知れない。なお、傍線を付した部分は、刊行年不詳の『西国二十三番摂州勝尾寺略縁起』（一紙物、上段に縁起内容の絵あり。筆者蔵）に引用されている。

おわりに

善導が法然へ付属した布薩戒のことは、勝尾寺が語り始めたのではない。布薩戒の伝法は、聖覚がその奥書に法然の最後の述作であると記した偽書『浄土布薩式』によつて考案されたもので、室町末期より江戸初期に勃興してきたといわれる。⁽¹⁴⁾ 勝尾寺での布薩戒の付属については、すでに大玄の『円布顕正記余説』（宝暦四年〔一七五四〕）のように、布薩戒伝法

の譜脈に、大谷の禅室で建暦元年正月二十一日に授くと書かれて附合させ、譜脈の年月も法然に仮託した偽書『弥陀本願義疏』から作り出された妄説であるとする見解がある。⁽¹⁵⁾ しかし、その一方、岸了の『浄土布薩戒便蒙』（正徳六年〔一七一六〕）のように、大谷の禅室での布薩戒の付属は、「口決云、実雖其身勝尾、夢中境是花洛禅室」と理解して、勝尾寺での布薩戒の付属を肯定する見解も見られる。⁽¹⁶⁾

勝尾寺二階堂の由緒・縁起の内容は、布薩戒の伝法を相承した浄土宗僧侶によつて語られたと思われる。勝尾寺への浄土宗僧侶の関わりが始まつた時期は不詳であるが、例えば、『浄土宗寺院由緒書』には慶長七年（一六〇二）に勝尾寺で浄土宗の僧侶が入寂していることを記す。⁽¹⁷⁾ また、『応頂山勝尾寺縁起』下には、「自昔迄今、浄侶十余輩、昼夜念仏勿懈矣。毎遇月二十五日、例開善導法然二大師像宝帳。使四衆瞻礼、齐締勝縁者也」（一八丁表裏）と記され、昔から二階堂で浄土宗の僧侶により常念仏が行われていたことが分かる。さらに、元禄三年（一六九〇）刊の『三十三所西国道しるべ』⁽¹⁸⁾ には、勝尾寺の諸堂の中に「万日念仏寺」の記述が見られる。この「万日念仏寺」は『知恩院日鑑』などから「万日回向」を行っていた二階堂を指し、元禄十五年（一七〇四）に二万日回向が、享保十三年（一七二八）に三万日回向が行われていたことが分かる。⁽¹⁹⁾ これらのことから万日回向の始まりは、慶安年間

法然上人二十五霊場第五番勝尾寺二階堂の縁起(山 本)

(一六四八～一六五二) 前後頃と推測できると共に、浄土宗僧侶により、二階堂の参詣者に、善導と法然の二祖対面による浄土布薩戒の付属と板御影の由緒・縁起が語り始められるのも、この頃であると推定できる。

- 1 二階堂の堂宇や本尊の変遷については、既に拙稿「法然上人霊跡第五番勝尾寺二階堂について」(『印度学仏教学研究』四三―一、一九九四)で発表している。
- 2 玉山成元「二祖対面の史的考察」(藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇)、愛宕邦康「浄土宗『二祖対面』考」(『南都仏教』九二、二〇〇八)等参照。
- 3 五丁表裏(日本大学総合学術情報センター黒川文庫蔵『寺社縁起集』正編一七―七)。
- 4 一一丁表裏(京都大学付属図書館蔵)。
- 5 横山重編『古浄瑠璃正本集』四、八二―八三頁、角川書店、一九六五。
- 6 沙加戸弘「寛文六年の出羽掾と播磨掾―『よこそねの平太郎』と『ほうねんき』をめぐる―」(『文芸論叢』二九、大谷大学文芸学会、一九八七)、同「真宗関係浄瑠璃展開史大略」(『体系真宗史料』伝記編四、真宗浄瑠璃、法蔵館、二〇〇九)、佐谷眞木人「法然上人伝から古浄瑠璃『ほうねんき』へ」(堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社、二〇〇五)参照。
- 7 『摂陽群談』(大日本地誌体系三八)三〇五頁、雄山閣、一九七一。
- 8 『和漢三才図会』下、一〇三〇頁、東京美術、一九七〇。なお、承元四年の付属については、岡鑑の『浄土布薩広略戒儀決』(元禄一四年(一七〇一)、『浄土宗全書』続一三、一一〇頁)や円智・義山の『円光大師行状画図翼賛』三六(元禄一六年(一七〇三)、『浄土宗全書』一六、五四四頁)でも記すが、典拠は示さない。築瀬一雄『寺社縁起の研究』二九七頁、勉誠社、一九九八。
- 9 『同右』二九六頁。
- 10 四丁表(西尾市岩瀬文庫蔵『縁起集』所収)。
- 11 珂憶の伝記は、『現証往生伝』上(笠原一男編『近世往生伝集成』一、一六七―一六九頁)、『続日本高僧伝』(『浄土宗全書』一八、四五九―四六五頁)などにあるが、珂憶と二階堂との関係は不詳。
- 12 卷子本、十紙(勝尾寺蔵)。史料調査にご高配を賜った勝尾寺副貫主小嶋隆文上人に記して謝意を表します。
- 13 井川定慶「浄土布薩式の検討」(『佛教大学研究紀要』三八、一九六〇)、恵谷隆戒『改訂円頓戒概論』一九一頁(大東出版、一九七八)。また、大念寺文書の中の文禄二年(一五九三)「善導寺証誓令也授源譽慶巖布薩戒脈許可文(豎)」に建暦元年正月二十一日の日付が見られる(宇高良哲編『関東浄土宗檀林古文書選』三四一頁、東洋文化出版、一九八二)。
- 14 『浄土宗全書』続一三、五六〇―五六二頁。
- 15 『同右』二八七頁。
- 16 『増上寺史料集』五、一五〇頁。
- 17 下巻、一一丁裏(舞鶴市郷土資料館系井文庫蔵)。
- 18 『知恩院史料集』日鑑書翰篇二、一五〇頁。『同』一一、六〇頁。
- 19 (キーワード) 勝尾寺二階堂、善導、法然、二祖対面、布薩戒、板御影

(佛教大学職員)